

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2005-2008  
課題番号：17520221  
研究課題名（和文） 近代化の過程における女性表象の諸相に関する比較文学的研究  
研究課題名（英文） Modernization and Female Representation: a Comparative Study of Modern Japanese Literature  
研究代表者  
平石 典子（HIRAISHI NORIKO）  
筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・講師  
研究者番号：20293764

## 研究成果の概要：

本研究では、西ヨーロッパと北米地域の女性表象の影響を強く受けた結果、日本の文学作品を中心とする言説の中に誕生した新しい女性の表象を分析・考察し、その諸相を明らかにした。「近代化＝西洋化」する日本においては、ヨーロッパ文学のヒロインを模した存在として高等教育を受ける「女学生」が描き出されたが、そうした女性の表象の舞台として、近代化の過程を歩む都市が設定され、都市とそこに点在する近代的な装置が、彼女たちをめぐる言説を補強したことを解明した。また、非西洋地域として歴史的に「近代化＝西洋化」を経験し、しかもその「近代的」な女性像と「伝統的」な女性像の間に大きな隔たりがあった日本以外の地域の女性表象についても調査・考察した結果、日本を含め、そうした地域において近代化の過程であらわれてくる女性像は、振れた「エクゾティシズム」を身に纏っていることも明らかになった。さらに、女性の表現者たちが、男性たちの文学的想像力を利用する形で、「新しい女」像を構築しようとしたこともわかった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	900,000	0	900,000
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,300,000	510,000	3,810,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：比較文学・近代化・女性表象・ジェンダー・セクシュアリティ・「新しい女」・女学生

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、主に明治期の日本文学における女性表象の比較文学的分

析をおこなってきており、その成果を西洋世紀末文学の影響、青年の恋愛観と自己規定の変貌、対象としてのヒロイン像

の分析などの形で世に問うてきた。こうした女性表象の分析を通じて、日本の近代文学においては、一度「西洋」というフィルターを通すことによって捻れ、二重構造を持つことになってしまった女性像が出現しているのではないかと考察するに至った。

その中で、国外のケースに目を向けてみた時にも、「近代化」に際して文学の中の女性像が大きく変化している場合が多いことに着目した。2004年にチュニジアで開催された国際シンポジウムにおける口頭発表は、非西洋地域における近代化と文学作品における女性表象の問題を取り扱った端緒であるが、当地の研究者の関心も高く、さらなる研究の推進が必要であることがわかり、本研究へつながった。

## 2. 研究の目的

本研究は、文学作品を中心としたテキストに描き出された女性表象を分析し、社会の「近代化」と女性表象の変化との関連性を突き止めるとともに、その意味及び意義を、比較文学的視点から精緻に解明することを目的とするものであった。その際、「近代化」が研究の大きなテーマとなるため、19世紀以降、主に20世紀のテキストを取り扱うこととした。また、研究対象となる地域は、日本を中心とするが、日本のテキストに大きな影響を与えた西ヨーロッパ・北米地域、さらには非西洋地域として歴史的に「近代化＝西洋化」を経験し、しかもその「近代的」な女性像と「伝統的」な女性像の間に大きな隔たりがあった日本以外の地域の女性表象と比較対照することにより、研究に比較文学的な視野の広がりを持たせた。

## 3. 研究の方法

本研究は、19世紀以降、主に20世紀（日本の場合は明治中期以降から昭和年間にあたる）に出版された一次資料の調査、読解と綿密な分析のもとにおこなわれた。具体的には、以下のようなテーマを設定した。

- (1) 「近代化」と女性表象：都市の女学生をめぐる言説
- (2) 「宿命の女」と振れたエクゾティズム
- (3) 女性からの発信：「主体的な性」の行方

## 4. 研究成果

### (1) 「近代化」と女性表象：都市の女学生をめぐる言説

まず、「近代化＝西洋化」する都市において、ヨーロッパ文学のヒロインを模した存在として早くからテキストの中に描き出されたのが、高等教育を受ける「女学生」だったことに着目した。明治10年代から、女学生はさまざまなメディアによって注目される存在だったが、「新しい女」としての彼女たちが何を期待され、どのように語られていったのか、ということ、文学作品の中に描き出された女学生像と、実際の女学生を巡るメディアの言説の分析を通じて明らかにすることを試みた。アメリカ合衆国の女子高等教育をモデルとした日本の女学校は、女学生たちの社会的階層の問題などを当初から孕んでいたが、結局は良妻賢母主義教育を施す場所として定着した。その中で、女学生自身の戸惑いや諦めが描かれた、三宅花圃の『藪の鶯』のような作品も登場したが、女学生は男性知識人たちの恋愛と結婚の対象としてのみ表象されるようになっていく。彼らの恋愛観や結婚観を規定したのは、ヨーロッパ発祥のロマンティック・ラブ・イデオロギーだったが、このイデオロギーは、女性をも含む日本の知識階級の若者たちに受け入れられるために、精神性を称揚し、肉体性を排除するという戦略をとった。西洋文学の翻訳などにも、そうした読み替えは明らかである。その結果、日本的なロマンティック・ラブ・イデオロギーは青年男女に刷り込まれていくが、その一方で性的スキャンダルもメディアに登場するようになった。当事者である女学生たちは、メディアと文学によって、「女学生神話」というネガティブな言説の中に囲い込まれていくことになるが、そうした女性の表象の舞台として、近代化の過程を歩む都市が設定され、都市とそこに点在する近代的な装置が、「女学生神話」を補強する役割を担ったこともわかった。

### (2) 「宿命の女」と振れたエクゾティズム

しかし、一方で、女学生をめぐるネガティブな言説が、ヨーロッパ世紀末文学の影響を受けながら、新しい女性表象を形成したことも明らかになった。「女学生神話」は、女学生たちの知性を抑圧し、彼女たちを身体的(性的)な存在として規定したが、性的な存在としての女学生表象は、自らの性的魅力を利用して男性を誘惑する、悪女としての自覚を持つ女性像をも生み出し

ていくのである。この女性像は、ヨーロッパ世紀末文学の中の「宿命の女」像に近づいていくことによって、都会的で西洋的な、強いヒロインとなっていく。日本文学における「新しい女」像は、「文明」と「伝統」へ二極化していく女性表象の、「文明」側を担うものとして、「エキゾティックな強者」として位置づけられていることを明らかにした。

日本における「宿命の女」が、そのエキゾティシズムを「西洋」に求めることによって、ジェンダー間の力関係の逆転を容易にする、という図式は、大変興味深いものである。なお、非西洋地域として歴史的に「近代化＝西洋化」を経験し、しかもその「近代的」な女性像と「伝統的」な女性像の間に大きな隔たりがあった日本以外の地域の女性表象についても調査・考察した結果、そうした地域において近代化の過程であらわれてくる女性像が、往々にしてこのような扱われた「エキゾティシズム」を身に纏っていることも明らかになった。

### (3) 女性からの発信：「主体的な性」の行方

もう一点のテーマとして考察したのは、明治末の女性作家たちについてである。ここでは、大塚楠緒子と田村俊子という、いずれも、男性たちの文学的想像力を自分なりに読み替えて、新しい女性像を作り出そうとした作家たちを取り上げた。大塚楠緒子は、女学生の「その後」の物語を数多く描いたが、西洋の文学や文化に関する知識も作品の中に取り入れながら、女性の側からロマンティック・ラブ・イデオロギーを読み直す。そして、これまでにはなかった女性の生き方をも模索している。田村俊子は、『あきらめ』という作品において、女をめぐる言説に女の立場から参入するとともに、遊歩者 *flâneuse* としての女学生と、同性愛的な世界を描くことによって、女学生が単に視線を注がれるだけの存在ではないことを示す。この作品の分析からは、主体的な存在であろうとする女学生の姿が読み取れる。大塚も、田村も、男性たちの紡いだ女性表象をも取り入れ、それを自分なりに解釈して新しい女性表象を試みている。日本文学の中の「新しい女」が、男性たちの文学的想像力の産物でもあったが、女性たちも、その想像力を利用する形で、「新しい女」像を構築しようとしたことがわかった。また、1911年に創刊となった『青鞥』に寄せられた初期のフィクションからも、大塚や田村の作品に見られた特色を拡大する形で、

さまざまな方向での女性の主体性が主張されていたことが確認できた。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- (1) Hiraishi, Noriko. “Modernization and Literary Imagination: the Complex Image of Tokyo in Modern Japanese Literature,” *Language, Culture and Society on the Crossroads of the Civilizations (Proceedings of the International Scientific Conference)*, pp.26-33, 2008. 査読無
- (2) 平石典子、「明治東京の「宿命の女」」、『文藝・言語研究 文藝篇』第 51 巻、129-148 頁、2007 年、査読無
- (3) 平石典子、「日本における沙漠イメージ：「月の沙漠」が語るもの」、『北アフリカ学へ向けて—平成 16 年～18 年度筑波大学学内プロジェクト助成研究 (A) 研究成果報告書』、45 - 59 頁、2007 年 査読無
- (4) Hiraishi, Noriko. “Tokyo as Labyrinth: the mixture of modernization and tradition in modern Japanese Literature” 『特別プロジェクト研究報告書「比較市民社会・国家・文化」』、353-359 頁、2006 年 査読無

[学会発表] (計 10 件)

- (1) 平石典子、「ポップカルチャーの領分：現代日本文学・文化と日本研究」高麗大学日本研究センター国際学術シンポジウム「日本研究の境界、そして越境」高麗大学、ソウル、2008 年 12 月 12 日
- (2) Hiraishi, Noriko. “Femme Fatale and Sapphic Desire: Japanese Women Writing Around 1910,” Paper presented at the Session “Dissidence/Decadence: Comparative

- Sexualities at the Fin de Siècle,” 2008 Meeting of the American Comparative Literature Association, Westin Long Beach, Long Beach, 26 April 2008
- (3) Hiraishi, Noriko. “Modernization and Literary Imagination: the Complex Image of Tokyo in Modern Japanese Literature,” Paper presented at the International Symposium “Crossroad of Civilizations 5: Languages, Cultures, Societies,” Tashkent State Institute of Oriental Studies, Tashkent, 17 March 2008
- (4) Hiraishi, Noriko. “Degenerate Flâneuse: Contradictory Images of Urban New Women in Modernizing Tokyo,” Paper presented at the 18<sup>th</sup> Congress of the International Comparative Literature Association, Federal University of Rio de Janeiro, Rio de Janeiro, 3 August 2007
- (5) 平石典子、「「両性具有」の語るもの——T. ベン＝ジェルーン『砂の子ども』『聖なる夜』と松浦理英子『親指Pの修行時代』を結ぶ糸」公開ワークショップ「日本文学の女性性」二松学舎大学、2007年7月7日
- (6) 平石典子、「étudiante の憂鬱：一葉の周辺で」シンポジウム「語る女／語られる女」の近代—樋口一葉を中心に—、日本比較文学会第68回全国大会、日本女子大学、2006年6月18日
- (7) Hiraishi, Noriko. “Schoolgirls strolling in the Park : Representations of “New Women” in modern Japanese Literature,” Paper presented at the FILLM/AULLA 2005, John Cook University, Cairns, 19 July 2005
- (8) Hiraishi, Noriko. “The Emergence of the “Schoolgirl Myth” in Japanese

- Literature at the Turn of the Twentieth Century,” Paper presented at the Panel with Elise Tipton and Kazumi Ishii “Contradictions: The Image of Women in Modernizing Japan,” JSAA 2005, University of Adelaide, Adelaide, 4 July 2005
- (9) Hiraishi, Noriko. “Tokyo as Labyrinth: the mixture of modernization and tradition in modern Japanese Literature,” Paper presented at the Workshop on *Modernity and the City*, School of Languages and Cultures, University of Sydney, Sydney, 20 May 2005
- (10) Hiraishi, Noriko. “Modernization and cultural memories: Translation and transfiguration of the “kiss” in modern Japanese literature” Paper presented at the seminar of Department of Japanese and Korean Studies, University of Sydney, 7 April, 2005

〔図書〕（計 2 件）

- (1) 平石典子、『新しい若者』の誕生—明治の煩悶青年と女学生—、「多元的共生」の国際比較」モノグラフシリーズVII、111 頁、2008 年
- (2) 平石典子、「読み替えられたイプセン——明治末の『ヨーン・ガブリエル・ボルクマン』」、筑波大学文化批評研究会編『テキストたちの旅程——移動と変容の中の文学』、29-45 頁、花書院、2008 年

〔その他〕

〔書評〕

- (1) 平石典子、「Barbara Sato. *The New Japanese Woman: Modernity, Media, and Women in Interwar Japan*」、『比較文学』第 48 巻、日本比較文学会、

157-161 頁、2006 年

6. 研究組織

(1)研究代表者

平石 典子 (HIRAISHI NORIKO)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・講師

研究者番号：20293764